

鈴木「生死の宗教文化学」への質問・コメントと回答

講義内容について

回答済	B	死と生の儀礼が対応してあるとあり、すごく納得できました。少し気になったのですが、三周忌は死後2年後ではないのでしょうか。
	C	人の生死が人々がもつ固有の文化によって定められるのだとすれば、異なる文化をもった二人が、双方に関わる生死の問題に直面したときは、どうすればよいのでしょうか。
	C	死は文化ということでしたが、例えば外国人の母親が日本で妊娠を断念する場合、どのように文化の違いを乗り越えるべきでしょうか。
質問		スライドの最後に示された日本人の生死観に関する図表は本当に正しいのでしょうか。この図表では人の生死が循環しているかのように描かれています。しかし、日本には古くから祖霊信仰の文化が根付いており、死者の魂は祖霊となって家や集落を守り続けるというような考えがあったと聞いたことがあります。この祖霊信仰の考え方と、生死の循環の概念は相反するものではないのでしょうか。
回答		「正しいか」「正しくないか」というレベルの話ではありません。質疑の中でお話ししましたように、こうした死生観という「観念」の問題は、人によって多少ズレたり、そもそも全く異なってくるものがあります。その意味で言いますと、ここで坪井さんをお出したのは、私の発表の流れの中で、人が宗教儀礼をするのは何故なのだろうか、といった疑問に対して上手く回答していると思ったからです。あなたのご指摘の通り、祖霊信仰という言い方があり、民俗学者の柳田國男などが強く述べてきているのですが、そこでの考え方は、イエスの死者は死後祀られることで死のケガレが取れ、「吊り上げ」を過ぎることで、そのイエスの他の死者の霊魂と融合することで祖霊となり、そのイエスの子孫たちを見守る氏神になるのだといったテーゼにまとめられています。あまりにも宗教がかかっているという批判もあって「祖霊神学」と呼ばれることもあります。……。そうした考え方と坪井の考え方は明らかに違います。とは言え先にも述べましたように、どちらが正しいと言うことはなく、場合によると、同一人がある時は坪井説、ある時は柳田説となることも十分に考えられるのです。宗教的な問題を研究する際には、合理的なスケールでのみ見ていると理解不能になってくる場合があります。良いか悪いかではなく、現実にそのような場があったなら、まずはそれをありのままに見つめ、そうした矛盾めいたものがあることの意味を探究してみましよう。
質問		ラセン状に次元が上がるとは？
回答		全く同じ世界に“生まれ変わる”のではなく、その世界の例えばその後の時代に生まれるといったイメージです。
コメント		死後霊魂の存在についてのアンケートでその他の割合がかなりあったが、具体的にどんな例があったのか気になった。
回答		一番多いのは「わからない」というものです。本心が「信じる」である場合、このように答えれば、「非科学的」とか「迷信」といった批判はされなくて済むからではないかと、私は考えています。逆に本心が「信じない」人は、わざわざ「わからない」と答えることはないのでは、と思います。つまり「その他」の中の多くの人は、本心は「信じる」と言いたいのであるが、そう言ったら言い過ぎ、恥ずかしいと言うことで、この回答を選んでいるのではないかと推測しています。
コメント		人間にとって生はどこからか、ということや、死はいつからかということについての様々な考え方を知り、比較することができ、とても興味深かったです。特に最後に示された日本人の生死観の図については、成人過程での儀礼は本人にとって大きな影響を持つと思いますが、死後の儀礼は残された周囲の人々の中でしか意味がないのではないのでは、と思いました。
回答		死者に対する儀礼、例えば葬式は誰のため？と言われた時どのように考えられますか？残された生者のためさ、と言うことはある程度納得がいくのではないかと思います。しかし世の中には、死者のためになっていると考える人もいないわけではありません。ここで改めて考えてみると、死者のためになっていないと言うことは証明できません。わからないことについては判断保留するしかないと思います。宗教学では何かを信じている人が居た場合、その信じている内容の真偽を判断するのではなく、そのように信じる意味の追究を行います。
質問		死の理解と、死後の身体の扱い（土葬と火葬など）に関係はあるのでしょうか。
回答		死後の再生を信じるかどうかで、火葬が忌避される場合があります。現在のキリスト教では火葬がかなり受容されていますが、復活した際に身体が焼けて壊れることをまずいと考える考え方もあります。神道、儒教、イスラームなども同様です。時代と共に変化しているところはあるのですが。

質問	今まで、生や死が文化の一部であるとは考えてこなかったが、科学技術の発展とともに捉え方の枠組みが変化している例を講義内容概略で読んだことにより、生や死が揺るぎない真理とは異なり、時代を通して人々の生活とも密接した文化であると実感した。また同時に疑問も出てきた。限りなく答えのない問題となってしまうが、はたして今までの人間の生や死の探究は無駄になってしまったのだろうか。また、生や死の枠組みを変化させるという行為は禁忌に値するのではないかという問いである。
回答	今までの人間の生や死に対する探究が無駄になるかどうかは、われわれ、そしてこれからの人間次第ではないでしょうか？ 人間は自然を作り替えて快適な生活を送れるように文明を発展させてきました。こうした対自然的な営みはとりわけ医療などの分野においては“神の領域”との境に踏み込みかけているところもあるように思います。生殖医療や臓器移植など、少し前の人類なら知らなかった領域が次々に生まれています。このあたりの判断をする際には、自然科学的知見のみならず、倫理学や哲学の考え方が重要な指針となってくると思います。総合大学である東北大学で学ぶ皆さんは、そういった理系・文系のバランス感覚を身につけ、次の時代を作っていくて下さい。
質問	①宗教ごとで何故「生」について異なる部分があるのですか？ ②教授自身は「生と死」はどこからどこまでかと思えますか？
回答	①宗教それぞれの歴史の違いに起因され得部分もあるが、現代社会においては、個別宗教発祥の頃には想像も出来ない生殖医療などがあるため、それぞれの宗教教団では教義を担当する部署で教への現代的読み込みをしています。つまり宗教教団それぞれの教えも、実は時代的な展開をしているのでスタティックに捉えられない部分があるのです。 ②私個人としては広く捉えたいと思う。受精から三徴候の死まで、かな。あくまで私的感覚ですが。
質問	人の生命のはじまりが文化によって違うことに驚いた。私は受精卵が生命のはじまりだと考えている。(質問)先生は、何が生で、何が死だとお考えですか。
回答	上の②で回答済み
質問	人工妊娠中絶について、アフリカ、ラテンアメリカと群島国家で違法とされることが多いようであるが、どのような要因が考えられるか
回答	一つの原因として、宗教の教えが影響しているのではないのでしょうか。
コメント	宗教ごとに確かに生・死の見方考え方は違うようだ。生であれば赤子へ身体的な傷をつけるとか死であれば埋葬の仕方では違いがあるはずだ。脳死などなど、「死は人間が選べる」と資料にあった。では自殺はどうか、私らには生きる権利があり義務はない。若者の自殺率が高まり続ける日本の現状に思う所はあるだろうか。全体の自殺率は減少傾向にもかかわらず。自殺は文化なのか。人工妊娠中絶のように自殺を罰する法律はない。
回答	「死は人間が選べる」の意味を誤解なきよう。 私がそのように書いたのは、「死の定義」についての話です。 あなたが気にされている「自殺」については、一概に言えないいろいろな問題があることと思います。 とはいえ、「自殺」を選択するまで追い込まれる状況は、全く当事者個人の問題だけであることはないと思う。 その意味で、自殺願望者・希死念慮者に対して、周りの人が手を差し伸べるべき“場”は存在すると思えます。
質問	なぜ宗教間で生の誕生の時が違うのか。
回答	世界には、何故さまざまな宗教があるのでしょうか？
質問	お話しされていましたが、人間として認識される着床 21 週後の胎児を殺してしまう「死産」についてどうお考えですか。
回答	2 2 週以降で亡き者にしてしまうと、「死産」ではなく「人工死産」と言った方が正確です。「死産」の中には、「自然死産」もありますので。 どうお考えですか？といわれても……一概に言えないところがあると思います。母・子の状況も身体の問題、社会的問題などいろいろな場合があります。
質問	死生観の移り変わり：いつから妊娠中絶や臓器移植が認められるようになったのか。そのきっかけとは。
回答	「認められる」というのは誰からですか？妊娠中絶にしろ臓器移植にしろ、法律で論ずる以前に、技術進歩に伴って社会の中で実施する動きが出ていたのではないのでしょうか？
質問	①文化ごとに死の規定は違うのに、共通した納得できる死の理解・基準をつくることは可能か。 ②科学技術の発展とともに、死生観はどう変わってくるか。③死がなくなるということはありえるか。

回答	①人間社会が一つの文化になれるならばあり得るかも知れませんが、ま、不可能でしょう。∵文化は価値観ゆえ。 ②現在進行形で誰もわからないと思います。そんな中で何故死生観を研究しているのかと問われれば、正解無く皆が試行錯誤しながら進んでいる現状の意味解明をし、さらにその次の時代がどのように展開するのか予想したいという欲求からでしょうか。③「死」を何と定義するかですが、Man is mortal.だと思えます。
質問	宗教ごとに生のはじまりがちがい、それぞれの受精時や、受精後 40 日などありました。しかし、受精や着床という考え方が広まったのは、宗教の歴史ほど昔でないと思うのですが、途中から導入されたのでしょうか。
回答	生殖医療など、仏陀やキリストを初めとする宗教の創始者が生きていた時代には存在しなかった問題に 対峙し、多くの宗教教団は科学との関係も考えながら対応策を考えています。
質問	鈴木先生は、霊肉二分論が、多くの人々が持っている考えだと述べられたが、肉体があり、 脳の神経活動があるから、そこから意識が生まれ、心、すなわち魂が生まれるので、心と 身体は一つのものなのではないかと思うのですが…。先生はそこをどうお考えですか？
回答	「霊肉二分論」的考え方が顕著になるのは、死後の死者の扱いの中でのことだと思います。生きているう ちは、眠って夢を見たりする時でもなければ心と身体は普通は一体です。
質問	先生が講義の中で挙げられた霊肉二分論について、その説明をするときに先生は、日本人 のお墓参りを例に挙げ、もうそこに死者の肉体はないが、人々は墓に行っているから、ど こかで肉体とは別の靈魂の存在を信じていると仰いましたが、宗教が異なる西洋では、死 者は少なくとも埋められる瞬間は、肉体があるままで、お墓に行く人は、そこに肉体があ るというイメージを持っていると思います。ということは、西洋では、霊肉二分論とは、 別の考え方があるのでしょうか。
回答	ご指摘の件、日本における土葬墓の話としても同じことですね。「土に還る」という言い方がありますが、 何らかの事情で土葬墓を掘ったことのある人たちは、土葬された遺体が、ある時間が経った後には骨を残 すことなく土に還ってしまった光景を見たのだと思います。つまり死後経過時間によっては、肉体は何れ朽 ちてしまうものといった感覚は西洋（と一言でまとめ上げるのは危険ですが）でもあったのではないでしょ うか？肉体＝「可視、穢れ、腐敗→消滅」に対し、靈魂＝「不可視、清浄、不滅」などといった対比が出 来るかも知れません。
質問	霊肉二分論について、縄文期の日本ではアニミズムの信仰があり、死者の埋葬法として屈 葬が主だったということが知られています。これは、死者の靈魂が離脱して生者の集団に 悪影響をもたらさないように、と聞いたことがあります。当時の人々は、完全な死をどこ で線引きしていたと思われますでしょうか。また、世界的に見て、他のアニミズムの文化 では、このような考え方、解釈は同じように存在する・したのでしょいか。
回答	縄文期の人々にとっての「完全な死」については、考古学の先生に聞いて下さい。 死者に対する、親しさの対象と忌避すべき対象というアンビバレンツの感情は、多くの所に見られるのでは ないでしょうか。
質問	生死もないような文化はあるのか？
回答	一応「文化」を「way of life」と考えるならこれは人間が持つものであると思います。とするなら「生死もな い」状況はあり得ないのではないのでしょうか？
質問	もし、ある人間が記憶を失ってしまって、取り戻せない時、靈魂や精神がない、もう異な るので、その人は「死んだ」と言ってもよいのだろうか。 もし、人間そっくりな性格を持ち、活動するアンドロイドが誕生したとしたら、それは「生 まれた」と言ってもよいのか。もしそれが壊れたとしたら「死んだ」と言ってもよいのか。宗 教文化学的に「生物」をどう定義づけるのか。
回答	「人間」とは何なんでしょうか？認知症の年寄りに対する問題などで、現代的な問題ですね。
質問	墓参りに関して言及がありましたけれども、なぜか私は墓参をすると、気を失いそうになり ます。墓石を見ることや線香の香りをかぐこと、手を合わせること、…分析的に1つ1つ の行為を考えても、気の失う合理的な理由とはならない。そのうえ、墓に葬られているの は私の会ったことのある人間ではない（今は祖父と曾祖母が亡くなっているため、事情は 変わりつつありますが）。それにもかかわらず、墓参をすると気を失うのは、死というもの を具体的なものとして捉えているからではなく、抽象的で意味の分からないものと認識し ているせいかもしれません。儀式を行う理由も未だに分かっていないのでしょうか。死を文 化として捉えることに抵抗があります。
回答	私は「死」というものを文化の立場から考えたのですが、あなたが述べられている、墓に行った時の経験に 関連づけて「死」を考える際、文化として捉えるのであれば、どのような捉え方をなさっているのでしょうか？

質問	イスラームの生まれるの定義(?)に受精後40日ないし妊娠13週頃以降とありましたが、何故受精後40日ないし妊娠13週頃以降なのでしょう。この40日や13週といった数字に意味はあるのでしょうか。
質問	カトリック教会は人の出生について「受精の瞬間から人」と宣言しているとありましたが、人工妊娠中絶としての殺人と、犯罪としての殺人はどのような考え方をもって区別しているのでしょうか。また、そこに何か考えがあるとしたら、日本にはなぜ「人として認められるかどうか」にこだわる考え方が存在するのでしょうか。
コメント	生まれてからのプロセス(儀礼)と死後のプロセスが対応していることが興味深かった。
コメント	生の儀礼と死の儀礼の間隔が似ているということがとても興味深かったです。
コメント	生と死に関する行事が生まれた時と死んだ後に多いのは、その時が生と死を感じられるからだと思った。あと神社と寺の経営も関わっている気がした。
コメント	生の儀礼と死の儀礼の中で知らないものが多かった。
コメント	生と死の違いは多いと思いますが、共通点が意外に多い事は驚きました。
コメント	確かに「人工妊娠中絶」を考えれば、胎児は生物としてのヒトとは認めていないことになる。胎児も立派な命であり、その命を殺すことを合法とするのはいかがなものかと思っていただけれど、「宗教の文化学」からみれば、胎児を文化をもった人間とみなすと知って、考え方のアンゲルが広がりました。
コメント	脳死を人の死とするかという議論はとても難しく、これからもなされていくと考えられるが、今まででたくさんの解釈が行われてきて、変化をしてきたことを知った。今から自分の身にも関係のある中絶の話もあり、死を考えることで生も改めて考えることができたと思う。
コメント	死や生が絶対的なものではない、というように解釈しました。その上に、人間が作り出したもの、まとめると、「文化」が人間の生死を支配しているように思いました。
コメント	私も当たり前様にお墓に行って清掃をして、祖父など祖先に手を合わせ今までの報告をしています。これが宗教、死生観であるというようなことに納得しました。
コメント	死後の世界は、未知だから人はいろいろと考えると思う。生物的な死は、生命活動の有無で判断できるが、そうでないものは、残された人々によると思う。葬儀は、残された側が旅立つ者の死を受け入れるためにあると思う。
コメント	ヒトは死ぬという事実から人間はどう考え、どのように生きていくのか…。1セメの授業とほぼ同じ内容でしたがやはり何度聞いても興味深い内容でした。
コメント	熟語一つとってもさまざまな読みと意味があることを再認識し、言葉の奥深さを感じた。
講義内容以外について	
質問	死後の世界を考えるのは、人が心と身体を別々に考えているからだと思うのですが、それを考えるには、まず心、すなわち意識がどのようにして生まれ、なぜ人間にだけ意識があるのかというのを考えなければならないと思うのですが、いかがでしょうか？
回答	ごもっともです。ご指摘の件は、自己の問題として考えることは可能ですし大事なことです。ただ今回発表した私の研究スタンスは、現実世界において人々が実行しているさまざまな行為(宗教的行為)を手掛かりにその意味を考えて行くところにあります。
質問	20分じゃものたりない…。23日の講義、楽しみにしております!!! 先生は自殺についてどう思いますか？自殺に関する宗教的事例はありますか？
回答	ご質問の回答になるかどうかわかりませんが、社会学者デュルケムの『自殺論』は一読の価値があるかもしれせん。
質問	少子高齢化が進む中、死は身近になる。単刀直入に聞くが、「安楽死」についてどう思うか。尊厳死という言い方もされる。現在日本では議題に上がっているという話を私は聞かない。スイスやオランダではちょっとずつ安楽死制度の確立が進んでいる。日本ではまだだが高齢化の進行とともに十年か二十年内に話題となるはずだ。個人的には賛成だ。あなたはどうか。そしてその理由は？葬儀を行わないことが増えているそうだがどう思うか。
回答	「安楽死」と「尊厳死」、似た用語であるが、微妙に意味が違います。議論の前に、まずは、こうした用語の概念整理をすることが必要です。 「葬儀」を行うか否かについては、まず葬儀を何のために行うかという問題があると思います。これは遺族、親族、知人、友人、そして死者個人にとってということ、つまり誰にとっての葬儀かという点から考えるとさまざまな機能が上げられると思います。死者自身の希望と遺された身近な人々の「想い」のバランスの中、葬儀の実施を考えることになるのだと思います。
コメント	妊娠22週以降の胎児にも人権が与えられるということですか？

質問	人工妊娠中絶について、胎児を「人間」として尊重することは不可能でしょうか。(例え、殺人だとしても)
コメント	「宗教」というものは、時代の経過につれて、多様な派閥が誕生していくため、人の都合のいい解釈が入り、異端や正統を決めたり、新しい宗教（神：崇拝対称）ができたりしている。「生」というものも、時代の経過や各地域によって異なるのかなと思いました。また、「生」と「死」という2つの状態のみで定義すること自体に問題があるのではないかと思いました。
コメント	久しぶりに墓まいりに行こうと思いました。